

# エンカウンター（ENCOUNTER）

## 第 86 号

平成 21 年 6 月 20 日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 045-912-1960

### ヒルティ

#### 「眠られぬ夜のために 第一部」

（草間平作・大和邦太郎訳・岩波クラシックス）より（1）

カール・ヒルティ (1833-1909)

カール・ヒルティ(Carl Hilty)は、1833年2月28日に、スイスのザンクト・ガルレン州の小さい町ヴェルデンベルクで生まれた。父は教養の高い有名な医者であったが、カールが25歳のとき亡くなった。母は、才能豊かな極めて信心深い夫人であった。ヒルティの神秘的な傾向、勤勉、愛、不屈の精神、快活、質朴、詩才等彼のすぐれた資質は、この母からの遺伝または感化によるといわれる。18歳で、ドイツのゲッチンゲン大学に入り、法律学、哲学、歴史を学んだ。カント哲学に深い興味を覚えた。翌年ハイデルベルク大学に移ってからは、法律の研究と読書に専念した。卒業後出身地のキュール市に戻り弁護士を開業、18年間務めた。1857年、ヨハナ・ゲルトナーと結婚した。

ヒルティは、スイスの習慣に従って、早くから軍籍に実を置き、終身この地位にあって活動した。1856年に法務歩兵将校となり、1892年にはスイス陸軍裁判長となり、17年間陸軍司法の指導者として勤めた。この多忙な生活の中で読書、研究を怠らず、1978年にはベルン大学教授に招かれ、最初はスイス国法、後には国法学や国際法を講じた。1909年には、ハーグの国際仲裁裁判所のスイス委員に任命された。1909年10月12日死去した。77歳であった。

ヒルティは、老年になるまで非常に元気で、朝の時間を大切にした。克己心が強く、勤勉で、規則正しい生活を送った。時間を節約し、絶えず読書に努め

た。良書を選び、原典について、規則正しく精読した。ことにギリシャ、ローマの古典を好み、ストア哲学のエピクテトスとマルクス・アウレリウスを愛読した。そのほかに彼が深く感化を受けた書物は、聖書、次いで、トマス・ア・ケンピス、ダンテ、カーライル、クロムウェル、スポルジョン、テニソン、トルストイなどである。

彼は書斎の人ではなく、実際家であった。学者であるばかりでなく、政治家であり、歴史家であった。1886年以降、編集者、執筆者として『スイス連邦政治年鑑』を毎年発行した。この本は、23年間毎年規則正しく発行された6~700ページにわたる広範な年報である。政治、法律、社会問題、宗教、哲学、文学、芸術等の各部門にわたる研究、報告、批評が載せられ、多くはヒルティ自身の執筆によるものであった。

ヒルティが世界的名声を得て、スイスの聖者、現代の預言者と世に広く仰がれるようになったのは、主にその宗教倫理的著作による。最も広く読まれているのは『幸福論』3巻(岩波文庫)、『眠られぬ夜のために』(第一部、第二部)(岩波文庫)、「書簡集」などがある。白水社からヒルティ著作集が出版されている。(以上『眠られぬ夜のために 第一部』に収められている「ヒルティの生涯と著作」の要約である。)

日本では、新渡戸稲造が一高校長をしていたころ、ドイツ語教授であった岩元禎教授が、『幸福論』をドイツ語の教科書に使う以来、三谷隆正、南原繁、その他無教会の関係者によって紹介され、日本で広く読まれるようになった。

『眠られぬ夜のために』は、何種類か翻訳があるが、岩波文庫の大判である岩波クラシックスで紹介することにします。また、ヒルティの文章では、聖書の箇所だけが、文章の終りに示されていることが多いのですが、できるだけ、文章の冒頭に、聖書からの引用の形で紹介したいと思います。

また、本書で強調する傍点がつけられている箇所には、アンダーラインを引くことにします。

1月1日

見よ、私はあなたを練った。しかし銀のようにではなくて、苦しみの炉をもってあなたを試みた。(イザヤ 48・10)

絶えず偉大な思想に生き、些細なことを顧みないように努めなさい。これは一般的にいて、人生の多くの苦渋と心配事を最もたやすくのり越える道である。最も偉大な、しかも同時に、一般に最もわかりやすい思想は、現在ではキリスト教の形をとる神の信仰である。

しかし、古い時代から今日まで、いじけた、あまりに偏狭な性質のキリスト教も存在した。これは、キリストの本性とその教えに合致しない、あるいは少なくとも完全には合致しないものであり、実際、そのためにすでに多くの心の立派な、教養の高い人々が、キリストの教えから遠ざかったのである。

もしあなたが人生の幸福をこころから望むならば、キリスト教を神学や教会主義と取替えてはならない。むしろ、あなたは自分でキリスト教をその源において、すなわち、福音書のうちに、とりわけキリストみずからの言葉のなかに、求めなさい。キリストの言葉と比べられるものは、どんな哲学にも見出すことができない。

われわれは、ときとして、自分がどんなに強く浄化され、どのような方法で浄化されたいかを、みずから選ぶことができる。しかしそのうちに、品性の純金は、ただ強度の、しかもたびかさなる精煉によってのみ得られるものだということを、はっきり悟るにちがいない。

病気は、それが正しく理解され善用されるならば、心の純化に到達する、手っとりばやい方法である。

1月3日

人生の唯一の、道理にかなった目標は、地上に神の国を、つまり、不和と生存競争の国ではなく、平和と愛の国を築くことである。この事業に協力するかぎりにおいて、われわれの生活は目的と価値とを得ることになる。ひとはだれでも、活動することや苦難に堪えることで、この事業に参加することができる。

たえずなにか有益な仕事をし、あせったり、心配したりしないこと。また、われわれが出会う事柄やわれわれの気分を、つねにみずから支配し、決してそれらに支配されないこと。これが、いつも年の始めにいただくべき正しい生活のプログラムである。しかしこのプログラムが実行できるのは、われわれが万物の主と親密に堅く結びつき、その導きに無条件に従おうと決心する場合に限る。そうでなければ、どんなに賢いどんなに強い人でも、周りの人間や状況にもてあそばれて、たえずそれに抵抗して身を護るだけが関の山となる。こうして、年と共にかさむ、ささいな、しかも骨の折れる雑事のために、人生は一つの重荷となり、ついにはその重荷の下にひしがれて、まちがいなく、そしてたいていは、悲惨な破滅に陥るのである。…

あまり働きすぎてはならない。また一般に、秩序ある暮らし方をすれば、その必要もない。一方、過度な仕事は、力を維持する最上の方法であり、また非活動的な力やたるんだ力を救う唯一の、無害な刺激剤でもある。

1月5日

苦しい事件に出会ったときは、まず、それについて感謝に値する事柄をさがし出し、それを率直に感謝しなさい。そうすれば、心にいつそう安らかな気分が生じ、気持ちが落ちつくと、その他のことも堪えやすく思われてくる。たえずこれを練習していると、しだいに良い習慣となって、人生がたいへん楽になる。

われわれが完全に神の導きに身をまかせるならば、生活を主として苦渋にし、しかも不断の心労をもってしてもどうにもならない多くの事柄に対して、高貴な無関心を会得することができよう。しかしこの「軽やかな心」を得るには、神をかたく信じ、その命令に必ず従うことが前提である。

1月10日

「沈黙で失敗するものはない。」このいささか風変わりな言葉は、さまざまな社会的地位にあって、成功を収め人に抜きんでた私の親友の一人が、いつも口にしてきた文句であった。実際、きわめて多くの面倒で不愉快な人生のいざこざも、しばしばこのやり方で、たやすく切り抜けることができる。これに反して、多くの人々が愛好する、いわゆる「自分の意見発表」は、たいてい、ただ双方の意見のくいちがいを一層きわだたせるだけで、時には事態を收拾のつかないものにしてしまうことがある。

「よく考えておきましょう」という言葉も、ひどく激しやすい人や、気心や決心が変わりやすい人に対しては、しばしば奇跡的な効果がある。文通の場合にも、返事したくないことには答えず、また催促されてもこの決心を変えないことが、多くの不快な議論をうち切る確かな方法である。ところが、大部分の人が、三度目にはその決心をひるがえしてしまう。

しかし、改めさせることのできる、また改めさせねばならない明白な不正に対しては、沈黙してはならない。不正を心ひそみに憎みながら黙っているのも、まちがいである。

1月14日

うしろを見ないで、つねに前方を見なさい。最後には、この世の命をこえてかなたを見なさい。あとを振り返るのは何の益にもならない。ただし、まだ改めうることを改めるためや、過去の失敗をこんご用心するためや、または、ひとから受けた恩誼に感謝をもって報いるために、そうする場合は、また別である。

1月21日

絶えず祈りなさい。(テサロニケ 5・17)

神との交わりには、特別の時刻(いわゆる時禱)や時期(朝夕など)や姿勢や身振りなどを全然必要としない。反対に、最も簡単な言葉、あるいはただ心に思うだけで十分である。いろいろな外的な用意はかえって妨げになることが多い。最も大切なのは、われらの主とたえず心のつながりを持つことである。使徒パウロはこれを「絶えず祈る」としているが、多くのいわゆる「祈禱者」たちはそのような祈りを全く知らない。

祈りは単純、かつ誠実に、すこしも形式にこだわらずに、なされねばならない(こういう祈りの仕方は今日の宗教教育ではほとんど教えなくなかった)、それだけでなく、なお祈りに対する神のお答えを聞くことができなくてはならない。そのためには、日常の騒々しさや利己心にすこしも妨げられない、微妙な心の耳が必要である。

ところが、多くのいわゆる「祈禱者」たちは、ただ彼らの決まり文句を口ずさみ、それが終わるとすぐ立ち去ったり、あるいはスープをさじに入れたりする、まるで実際にはなにごととも起らなかったように、まして神のお答えなどおよそ期待もしないかのよう。

1月22日

朝、目覚めると同時にまっ先に意識にのぼる考えが何であるかは、非常に大切である。そのときあなたは普段さまざまな偶然の原因から起るその時どきの「気分」に身をまかせるか、それともあなたの生活の手綱をしっかりと自分で握るつもりだろうか。今日もまたさっそく、目さきの心配や苦勞から始めるか、それとも新しい命の朝に対する感謝から始めるか。神との結びつきを新たにしようとするか、それとも、自分だけの力で「生存競争」を再開するつもりだろうか。どちらにするかで、その日の運命はきまるのである。

1月24日

「明日のことを思いわずらうな。一日の苦勞はその日一日だけで十分である。(マタイ 6・34)

この有名な言葉の後半はきわめて明白である。そこで、だれでもすぐこう言う、前半の命令も、それが実行できることでありさえすれば、よろこんで賛成したい、実際そうなれば人生はずっと楽になるだろうから、と。だが、この言葉は実行できるものである、ただし神の導きに従うかぎりにおいて。実際神の導きは最もすぐれた人間の知恵よりもはるかに賢く、ことにその企て給う時期を失することがない。…

この世でいつもキリスト教に逆らう最大の障害は、キリスト教に入らない者には、この教えの命ずるままに生きる可能性が、全く想像できないところにある。…なぜなら、信仰に入れば、人その人がまったく別人になるからである。信仰以前と同じ人間でなくて別の人が、前とちがって考え、ちがって行動するようになる。しかしそれには、まず元のままの(古い)人間が思い切って最初の「暗がりへの跳躍」を試みなければならない。そうするためには、もちろん、アウグスティヌスやカルヴァンのいわゆる「恩寵の選び」が必要である。しかしそれは、すべての人間に生涯に一度や二度必ず与えられるものであり、その時それをとらえて生かさなければならない。

1月31日

われわれは、すでにこの世において次のような幸福を知らなければならぬ、すなわち、どんな事情のもとでも、また、だれでも見な、手に入れることのできる幸福がそれであり、そして、われわれの状況が他の点でどのようであろうとも、つねに喜びをもって心を満たしてくれるような幸福である。このような幸福を得させるのが、哲学の理想的な任務であろう。もしそれができなければ、どんな立派な「体系」をもとうとも、本来、哲学などというものはわれわれの役にはほとんど立たないものである。

経験上から言うと、このような幸福をもたらすものは、ただ神への信仰、神のそば近くあることの実感、および、有益な仕事だけである。すくなくとも私はこれ以外に確実な方法を知らない。また私の知るかぎりでは、これ以外の道を発見したものはこれまでまだ一人もいないのである。

2月5日

こころみに、しばらく批判することをすっかりやめてみなさい。そして、いたるところで力のかぎり、すべて善きものをはげまし、かつ支持するようにし、卑俗なものや悪いものを下らぬものかつほろび去るものとして無視しなさい。そうすれば、前よりも満足な生活に入ることができよう。実にしばしば、まさにこの一点に一切がかかっているのである。



2月7日

ある文筆家は正当にもこう言っている。本当に大切なのは、正しい道にあることだけである。そうすれば、ほかのすべてのものはおのずから与えられる、と。

またこうもいえるだろう。福音書が聖霊と呼んでいるものを、自分の生活のなかに招き入れることだけが重要である。そうすれば、この霊が、それ以上のことは残らず果たしてくれるのだ、と。

そこで、さらに一步をすすめて稿も言えよう、しばらく聖書以外のすべての宗教書を閉じてしまいなさい。また、聖書の中でもキリストの言葉と行いのほかは、すべてさし措きなさい。その他のものは、魂の浄福を得るのに必要ではない、もっとも、時には信仰の有益な支えや刺激となることはあるが、と。

福音がただ働く人たちに対してだけ十分な効果を現わすという事実は、注目すべきことである。福音は働く人にとってはたえず元気を与えるものであるが、これに反して働かない人は(怠け者の聖職者も)福音になにか別のものを添えなければならない、例えば、たえまない集会や祝い事や教会の形だけの行事など、あらゆる種類のものが必要になる。こんな事柄は、働く人には、なければならないで済ますことができるものだ。

### 恩寵の選び

あなたのみ業(わざ)のためにこの私を  
永遠より選び定められたお方よ、  
そのしるしとして私に力をお授け下さい。  
心いさんで働く者となして下さい。

あなたの命令をすすんで果たすようお導き下さい、  
願わくば、あなたの大いなるみ業がなすとげられんことを。  
ただ信仰に生きる者のみが  
かくも美しく重き運命(さだめ)を負うことができます。

2月10日

あなた方が、いろいろな試練にあった場合、それをむしろ非常に喜ばしいことと思いなさい(ヤコブ 1:2)

試練にあっている最中にこの使徒の訓戒に従うことは、かなり困難である。使徒自身でさえ最も激しい苦難の時に果してこのような無限の喜びをつねに持ったかどうか、いくらか疑わしいくらいだ。実にキリストですらそれを持たれなかったのである(マタイ 26:37,38)。だから、いつでもそういうことができる人は、すでにこの世の生を超越しており、ただ試験を意味するにすぎない試練は、そんな人に対してはもはや必要がなくなっている。しかし試練に会っている者はたいがい、冒頭の言葉ではとても納得させられない。彼らはしばしばそれを、彼らの苦難に対するあざけりとか、無常なことばに過ぎないと解することがある。それとは反対に、彼らにまじめに期待しうることは、ぼんやり思案にくれたり、そればかりか痛恨をいただいて苦悩の中に沈んだりしないように、そしてむしろ、ただ「主よ助けたまえ」という単純なうめきの祈りをもってでもよいから、「助けの来る山を仰ぎ見る」(詩篇 121:1)ようにせよ、ということである。こうすれば、いつも多かれ少なかれ助けになるし、その結果、魂が熟慮できるほどに落ち着くならば、過去の多くの試練をふりかえる余裕もできて、それがいっそう元気づけに役立つものである。実際、これまでも多くの試練は、始め予期したよりもはるかに速く、しかも奇跡的な仕方で、すべて終ってしまったのである。(ヘブル書 10:32-39)

個人にとっても、民族にとっても、試練が必要以上に長くつづくことは決してない。しかしどちらにおいても、ある時期に達すれば、それ以後は溶かし(試練)がすべて無意味になり、従ってそれも止んでしまうことは、大いにありうることである。そうなれば、あとはただ神の裁きが行われるだけである。そして今や多くの人がこの道を進んでいるのである。(エレミヤ書 2:19,20,25、4:22,6:14,27-30)

2月13日

なにごとが起ころうと、すべては神のみ手から授けられるものと信じ、もはやいろいろと思わずらうことなく、ただ開いた門を通って行くなれば、その人の人生はすでに幸福になり始めたのである。それまでは、大きな辛苦ばかりがあい次いで起こり、その間に時々やすらぎの期間はあっても、それさえたいいは自己欺瞞と結びついている。

『神のかたわらにあること』、すなわち人間の魂に神の霊が「宿る」こと、これこそほんとうに魂の幸福となるのである。神の霊の宿りは、それをこの世のあらゆる財宝にまして重んじるならば、まだきわめて不完全な魂にも起こりうるが、そういう決意がなければ、もっと完全な魂にもそのことは起こらない。前者はこれによって徐々に、そして確実に浄められるが、後者はすこしも進歩することがない。…

2月15日

私たちは、見えるものによらないで、信仰によって歩いているのである。(コリント 5・7)

見えない世界を「信じる」ことによって歩くか、それとも日常の世界を「見る」ことによって歩くかにしたがって、人生は非常に違った相貌を呈することになる。われわれは同一の外的状況のもとで、絶望することもあれば、また実に平安に、それどころか幸福でいることもできる。

信仰によって歩む場合、それにいくらか「想像」があずかることもあろう。しかし、目に見える事物は、本当に、それが見えている通りのものであるだろうか。いわゆる「現実」の世界に関して、われわれは、実はまったくの謎と仮定の前に立っているのではなからうか。